越境人 ❶

～それぞれの国際貢献

いつの時代も国境を越える人たちがいる。支援の在り方はさまざまだが、彼らが国際社会で培った経験と知識は、今も内外の次世代へ脈々と受け継がれている。国際貢献推進条例を持ち、支援活動の先進県を目指す岡山から世界へ――。「越境人」の軌跡を追う。

支援参加医師の拠点に

さくら診療所理事長 吉田 修さん(50)＝徳島県吉野川市

診療所を開業した最大の理由は、海外支援に参加する医師の拠点を作りたかったからです。活動意欲はあっても、休暇はとれないのが現実。目指したのは、医師4人の仕事を3人で分担し、空いた1人が海外に出る――そんな働き方です。ある勤務医は10カ月間、ザンビアに行きました。

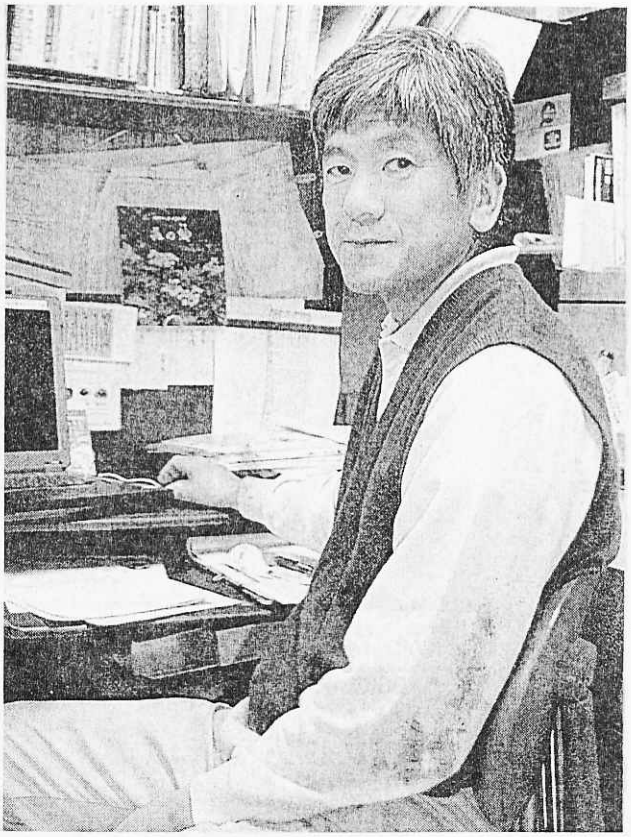
私自身の経験が原点にあります。医師になって青年海外協力隊に参加し、89年から2年間、アフリカ・マラウイに派遣されました。毎日、外科手術に励む日々です。貧困も感じました。しかし、派遣期間の2年が過ぎても後任医師が来ない。自分がいる間は良くても、帰国すればまたゼロになる。やがて帰国しましたが救いたい人が救えない。

帰国後、AMDAの専属医師としてネパールやルワンダに行きました。ここで基礎が完成したと思います。医療救援の大切さは理解していたのですが、もっと地域に根ざし、貧困構造を変えられるような長期プロジェクトに携わりたい。そう思うようになりました。

そこで、99年に診療所を立ち上げ、NPO「TICO（徳島で国際協力を考える会）」と活動を始めました。TICOの活動舞台は主にザンビアです。救急搬送システムの整備や診療所と大病院の連携体制を整えました。現地への資金融資も必要。きっかけはこちらで作り、あとは自分たちで稼いで軌道に乗せるような支援を目標にしています。自分たちがいなくても持続可能な支援でないと、一過性で終わります。

徳島県との連携も視野に入れています。県は医師確保のため、契約期間3年のうち2年を地域での診療、1年は自由に研修できる条件で募集しています。この1年を、TICOでの活動にあててもらおうという狙いです。

徳島でもザンビアでも、やりたいことは一緒。救える命は救いたい。さくら診療所は救急搬送も受け入れますし、そのため設備もある。簡単な外科手術もこなします。やれることは全部やる。国際協力の現場を踏んだ医師は、困った人を捨て置けないという気概がある。TICOの医学生向けセミナーでも、意欲のある若者が多く手応えを感じています。【石戸諭】



1958年生まれ、徳島県出身。99年、さくら診療所を開業。AMDAの菅波茂代表が開業した岡山市の旧菅波内科医院（現在のアスカ国際クリニック）にも勤務。AMDA専属医師として数多くの海外医療支援活動に従事した。医師と農家の"二足のわらじ"をはく。「海外支援も地域医療も継続が大事です」。